

ハンチントンの日本論について

和田正美*

一 國際政治の新しい動向

ここに二冊の本がある。題はそれぞれ『文明の衝突』及び『文明の衝突と21世紀の日本』であり、著者はどちらもアメリカの國際政治學者サミュエル・ハンチントンであり、譯者はどちらも鈴木主税であり、出版社はどちらも集英社である。かう書いただけで、この二冊がきはめて近い關係にあることはわからうといふものであるが、事實、『文明の衝突』と21世紀の日本』(新書判)は少し大まかな言ひ方をすれば『文明の衝突』(大著)の、日本人讀者向けのダイジェスト版なのである。以下、この二冊を比較對照させながら述べて行くことにするが、それは私のやうな國際政治學の素人にもハンチントンの所論が何とか讀めるといふことに加へて、その中には文化、文明といふやうな、およそ文學の仕事にたづさはる人間が避けて通ることの出來ない命題が含まれてゐるからで

ある。ハンチントンは文學にはまつたく顧慮してゐないが、にもかかはらずその論調は文學の研究家にも一つの問を投げ掛けてゐると言つてよささうに思ふ。ここでは國際政治學はまるで磁石のやうにそれ以外の要素を惹きつけてゐる。

しかしこの小論はハンチントンの全理論の紹介や論評を旨とするのではなく、この國際政治學者の目に映つた日本の姿の吟味検討といふことを中心的な課題にするつもりである。いふならば外から見た日本であり、その正否を選り分けることは私達の務めと言はなければならぬ。尙、ここから先、『文明の衝突』は『衝突』、『文明の衝突と21世紀の日本』は『21世紀』と略記することにしよう。

いくらハンチントンの議論から日本に關係する部分を抜き出すとはいつても、それを支へる主張の核心部分に觸れないですませることはもとより出來ないので、最初にそれを記すことになるが、彼は『衝突』の中でも、『21世紀』の中でも、彼が把握し得たと信ずる國際政治の新しい動向について當然のことながら様々に言ひ立ててゐる。『21世紀』に含まれる次の短い一節は彼の考への精髓を理解しやすい形で示してゐるやうに思はれる。

二十一世紀初頭の世界政治は、基本的に二つのかたちで冷戦時代のそれとは異なるだろう。第一に、冷戦時代の世界は主としてイデオロギーにもとづいて分けられていた。自由民主主義の國家、共產主義國家、そして獨裁主義による第三世界の國々である。出現しつつある世界において、國々の主な違いは、イデオロギーや經濟、あるいは政治ではない。それは文化の違いであり、そして國々を文化的

に最も大きく類別するものが文明である。第二に、冷戦時代の世界政治の構造は力によって二極化し、二つの超大国の影響力は他のすべての國家のそれをはるかにしのいでいた。現在、グローバルな超大国はたった一つしかなく、ほかにいくつかの主要な地域大国が存在する。つまり、事實上は一極・多極 (uni-multipolar) 世界になっているのだ。

私はこの一節を「理解しやすい」と評したが、ハンチントンの理論に初めて接する読者にとつては必ずしもさうではないだらうから、いささかの説明を試みると、第二の「一極・多極世界」といふのは、唯一の超大国（アメリカ）が超大国でありながら全世界を支配してゐるとまではいへず、世界のあちこちにいくつかの「地域大国」が君臨する現在の状況を指してゐる。それらの地域大国の具體例はハンチントンによれば、「ヨーロッパにおける獨佛連合、ユーラシアにおけるロシア、東アジアにおける中國、そして潜在的には日本、さらに南アジアにおけるインド、東南アジアにおけるインドネシア、南西アジアにおけるイラン、中東におけるイスラエル、アフリカにおけるナイジェリアと南アフリカ、ラテンアメリカにおけるブラジル」(傍點、引用者)である。ほとんどの地域大国はナンバー・ツーの大国を控へてゐるが、そのナンバー・ツーの中には、「中國にたいする日本とヴェトナム」といふ項目が含まれてゐるのであり、日本がこのやうに両方のカテゴリーに名をつらねてゐることは、日本の國際的地位の微妙な性格をハンチントンが充分に心得てゐることを表すものといへよう。

さて引用文の中で與へられた第一の特徴においてハンチントンは何を言はんとするのか。

一九八〇年代に米ソの冷戦が終結して、二極體制が過去のものになつたことは、世界が冷戦時代のやうな三つのブロック（二つの超大国と第三世界）ではなく、それより遙かに多くのブロックに分れて衝突し合ふことを豫想させる新時代が到来したことを意味する。それぞれのブロックを統括するものは何であるのかといへば、それは文明であり、一つの文明の中には原則として複数の文化が含まれる。文明の衝突こそ冷戦後の世界の本源のなすがた、かたちと言はなければならぬ。

ハンチントンが構築した理論の骨子は以上の通りである。
『文明の衝突』の發刊は一九九六年であるが、その原形をなす論文「文明の衝突？」が世に問はれて物議を醸したのは一九九三年夏のことであり、それから今日までに十年近くたつてゐる。この十年間の國際社會の動きを見ると、各地で激しい民族紛争が多發したことにかんがみて、ハンチントンの「文明の衝突」理論には一理があるといふべきだらう。一理も二理もある、とまでは言ひたくないが。

ハンチントンがそれほど重要視する文明について、その何たるかを彼にもつと問ひただす必要があらう。

「人類の歴史は文明の歴史である。それ以外の見方で人類社會の發展を考へることはできない」と述べるハンチントンは「單數形の文明」といふ發想をしりぞけてゐる。單數形の文明といふのは普遍的な世界文明があり得るとの主張であり、結局、それは、西歐文明が唯一の文明だといふ、十八世紀以來の西歐人の意識につながつて行く。ハンチントンはそれを誤りと決めつけたわけだが、彼のさういふ態度は餘所ながら私達の明治文明開化の歪みを明してゐるとはいへないだらうか。文明開化の心理は、西歐にだけ文明を見て、それ以外の地域は未開の状態に置かれてゐると考へる底のものだつた。

ハンチントンによれば西歐文明は幾つかある文明の一つに過ぎず、それが一時的にもせよ世界を制覇したのは、「理念や価値観、あるいは宗教（他の文明から改宗する者はほとんどいなかった）がすぐれていたからではなく、むしろ組織的な暴力の行使にすぐれていたから」⁽⁴⁾なのである。

それではハンチントンの考へるところ、現代世界にはどのやうな文明が存在してゐるのか。彼は次の八つを数へ上げてゐる。

中華文明。日本文明。ヒンドゥー文明。イスラム文明。西歐文明。東方正教會文明。ラテンアメリカ文明。アフリカ文明（存在すると考えた場合）。

私達はこのリストの中の「日本文明」にことさら注目しなければならぬ。『衝突』と『21世紀』をくらべると、ハンチントンがこの見出しに付した説明文は同一である⁽⁵⁾。

一部の學者は日本の文化と中國の文化を極東文明という見出しでひとくくりしている。だが、ほとんどの學者はそうせずに、日本のそれを固有の文明として認識し、中國文明から派生して西暦一〇〇年ないし四〇〇年の時期にあらわれたと見ている。

私達は一頃まで、日本が中國文明の一支流に過ぎないことを散々聞かされたが、ハンチントンにおいてこの説はいともたやすく捨てられてゐる。思ふにこれが真相なのではないだらうか。この問題に關する限り、私はハンチントンを全面的に支持したいといふ氣持である。日本國內の論調も最近に至つて、やうやく、日本に独自の文明を認める方向に動き始めたやうである。

ちなみにハンチントンの日本論に看取される歴史的事實の側面は割と正確である。たとへば『衝突』の中に次のやうな文がある⁽⁶⁾。

日本は一五四二年に初めて西歐と接觸して以來、十九世紀半ばまで、實質的に拒否の態度をとりつづけた。火器の獲得などのかぎられた近代化は許されたが、西歐文化の攝取はいちじるしく制限され、とりわけキリスト教については厳しかった。十七世紀半ばには西歐人はことごとく追放された。こうした拒否的な態度を終わらせたのは、一八五四年にペリー提督に強制的に開國を迫られた結果だった。そして、一八六八年の明治維新につづいて西歐から學ぼうとする必死の努力が始まった。

これは擴大しつつある西歐に非西歐社會の人々がどう對應したかといふことについて述べた文の一節であり、私達にして見ればごく常識的なことが書いてあるに過ぎないが、日本人ではなく日本史の専門家でもないハンチントンが日本の過去をここまで正確に把握してゐることは彼の所説に少なからざる信頼感を抱かせるに足るものであるといへよう。とはいへハンチントンがその思想に基いて歴史を解釋する、そのやり方といふことでは、信頼感をいささか手控へたくなる節なしとしない。この問題については後述するつもりである。

二 文化と文明

『21世紀』の中には次の一節がある⁽⁷⁾。

現在、世界中のあらゆる國々が自らのアイデンティティをめぐる大きな危機に直面している。いたるところで、人びとは人間が直面する最も基本的な問いに答えようとしている。すなわち、われわれはいったい誰かという問いである。

そして、人間がこれまでそれに答えてきた伝統的なやり方で——自分たちにとって最も大きな意味をもつものに依據することによって——答えを出している。人は、祖先、宗教、言語、歴史、価値観、習慣、制度によって、自分を定義する。そのうえで、文化的なグループと一體化するのである。すなわち、部族、民族、宗教にもとづく共同社會、國家、そして最も廣いレベルでの文明である。

書名も著者名も知らされることなく、いきなりこの文を見せられたら、これが國際政治を論じた書物の一節であることに誰も氣づかないのではないだろうか。アイデンティティの危機は哲學者や文學者の思索と觀察の結果であると思做すことの方が一般的であらう。ところがハンチントンの「文明の衝突」理論の根柢はこのやうなものである。自分が誰であるのか知りたいといふ、それ自體としては非政治的な欲求に世界の政治は左右されるといふ逆説が彼の國際關係論を支へてゐることになる。話は幾分横道に逸れるが、當今の日本のやうに、「人間がこれまでそれに答えてきた伝統的なやり方」に依據しようとはせず、「文化的なグループと一體化」しようともしないで、諸々の他者を排除し、人權の主張にうつつを抜かすことは、アイデンティティの危機を解消させる上で何の役にも立たないであらう。

『衝突』からも引用しておくことにする。⁽⁸⁾

文明は最も範圍の廣い文化的なまとまりである。村落や地域、民族集團、國籍、宗教集團などはすべて、さまざまなレベルの文化的異質性を含みながら、固有の文化をもっている。南イタリアのある村の文化は北イタリアの村のものとはちがうかもしれないが、兩者ともイタリア文化を共有していて、そのためにドイツの村落とは區別される。そうかと思うと、ヨーロッパの地域社會は共有する文化的な特徴によって、中國やヒンドゥー教の社會とははっきりと區別される。しかし、中國人もヒンドゥー教徒も西歐人もそれより廣い文化的まとまりの一部を構成しているわけではない。彼らは文明を構成しているのである。

この主張から、「文明は人を文化的に分類する最上位の範疇であり(中略)人のもつ文化的アイデンティティの最も廣いレベルを構成している」といふ結論が導き出され、そしてハンチントンはこれの數行先で以下の如き巧みな言ひ方をしてゐる。

人が屬する文明は最も廣いレベルの歸屬領域で、人はそこに強い一體感をもつ。文明は「われわれ」と呼べる最大の分類であって、そのなかでは文化的にくつろいでいられる點が、その文明の外にいる「彼ら」すべてと異なるところである。

ハンチントンの姿勢としてこの箇所から浮び上つて來る事柄には次の二つがあらう。

一つは彼が人間の最終的な歸屬領域を文化ではなく、文明としたことである。なるほど人間は彼を取巻く文化の中で、ただその中でのみ、く

つるいでゐられるが、その文化は他の、それに近い文化と共に、文明といふ、より高次のものに仕へてゐる。このやうに文化と文明はその質を異にしてゐるわけではなく、この二つはいはば、上の方で一本になる線でつながり、その線の上位には文明が、複数の下位部分には文化が存在してゐるのだ。この考へ方が私にとつて一しほ興味深いのは、日本の思想界に見られる観念をそれに對比させたくなるからであるが、このことについての考察はもう少し先に回すことにしよう。

もう一つの事柄は「われわれ」と「彼ら」が對立するのは自然の勢だといふことである。歸屬領域を異にする人々が親和感で結ばれることはあり得ない。さうすると「文明の衝突」は不可避のことになりさうであるが、だからといつて、衝突の結果、大量虐殺や戦争が惹き起されるのが好ましいことである筈はなく、各文明の中の人々は、極力、衝突を防ぐやうにしなければならぬ。『衝突』と『21世紀』はまったく同じ文で終つてゐる。

来るべき時代には文明の衝突こそが世界平和にとって最大の脅威であり、文明にもとづいた國際秩序こそが世界戦争を防ぐ最も確實な安全装置なのである。

ここで次の一節⁽¹⁰⁾を讀むことにしたい。

文明は文化の總體だとされているが、ドイツではそうではない。十九世紀ドイツの思想家は文明と文化をはっきりと區別して、文明は機械、技術、物質的要素にかかわるものであり、文化は價値觀や理想、高度に知的、藝術的、道徳的な社會の質にかかわるものだとし

た。この區別のしかたは、ドイツ思想界には根づいたが、それ以外の場所では受け入れられなかった。一部の人類學者は二者の關係を逆轉して、文化を原始的で變化のない非都會的な社會の特徴と考え、複雑なかたちで發達し、活氣ある都會的な社會を文明だと考えた。だが、このように、文明と文化を區別しようという動きは、一般受けせず、ドイツ以外は、「ドイツのように文化をその土臺である文明と切り離したいと願うのは欺瞞だ」というブローデルの意見に全面的に賛成している。

私はこの文を前にして感慨を禁じ得ない、といふのは、フランスの歴史家・ブローデルから「欺瞞」としてあしらはれ、ハンチントンからも相手にされてゐないドイツ流の文化・文明論こそ、日本の知識人の多くがいつの頃からかその正しさを信じるやうになつたところのものに他ならないからである。私は日本人の言論のすべてに通じてゐるわけではない。しかし講壇哲學者はいざ知らず、少なくとも文學者の中の心ある人々が、文明批評といふやうな少數の例外的な場合を除いて、文明の語を使ひたがらず、文化の語を愛用してゐることは明らかである。「文明は機械、技術、物質的要素にかかわるものであり、文化は價値觀や理想、高度に知的、藝術的、道徳的な社會の質にかかわるものだ」といふ固定観念が彼等には棲みついてゐると言つてよい。日本の思想家や藝術家がとかく古代ギリシアに惹かれて、古代ローマを疎んじがちなのも、前者には文化を、後者には文明を見てゐるからだらう。ところがハンチントンはさういふ思考を斬つて捨ててゐるのである。

この問題における私達の如上の態度は次のやうに解釋することも出来はしないだらうか。

拙論の中ですでに一度、明治文明開化といふ言ひ方をしたが、明治期に始まつた國家的規模での文明開化路線への反動として知識人は文明よりはむしろ文化の方に眼を向けたのかも知れない。これは支配階級・國民大衆と知識人の乖離を示すものではあるが、一方、日本の近代化はこのやうな兩極をかかへこむことで首尾よく進展し得たのだとする逆説的見解も可能であるやうな気がする。かう見てよいのであれば、ここには日本人のバランス感覚が働いてゐることにならう。

しかしそれが正しくあらうと正しくなからうと、文化と文明の間に斷絶を認めないハンチントンの流儀が説得的であることは否めない。私自身はそろそろ「文明」へのアレルギーから脱した方がよい頃かも知れないと思ひ始めたところである。

三 日本の孤立

ハンチントンは各國を文明とのかかはり方に應じて、構成國、中核國、孤立國、分裂國、そして引き裂かれた國家に區分してゐる。これらについての説明は煩瑣に渡るので省かせてもらふが、最後の「引き裂かれた國家」はこれだけでは何のことかわからないだらうから、簡単に説明すると、國民の間で、自分達にふさはしい文明は何であるのかに關して意見が一致してゐない國家の謂であり、その實例はロシア、トルコ、メキシコ、オーストラリアなどである。

この分け方に従へば日本は孤立國になる。このことではハンチントンが一箇の獨立した日本文明の存在を認めたことを想ひ起す必要があらう。彼によつてそのやうに見られた日本の特徴は四つに大別されるが、その第一は次の通りである。

他のすべての主要な文明には、複数の國が含まれる。日本が特異なのは、日本文明が日本という國と一致していることである。日本には、他の國には存在する國外離散者ディアスポラさえ存在しない。ディアスポラとは、祖國を離れて移住しているが、もとの共同體の感覚をもちつづけ、祖國と文化的な接觸を維持している人びとのことである。

たとえば、多くの日本人がアメリカに移住してアメリカ社會に同化しているが、ハワイを除いて、日本を離れた移民はたいして日本の文化的共同體の一員ではない。國と文明の獨自性の結果として、日本は他のどんな國とも文明的に密接な關係をもっていない。たとえば、アメリカとイギリス、カナダ、オーストラリアのあいだにあるやうな、またスカンジナビア諸國にあるやうな、そして東方正教會系の國々、ラテンアメリカ、アラブ諸國にさえしだいに強まりつつあるやうな文化的に密接なつながりがないのだ。

右の一節は『21世紀』から引用したのであるが、『衝突』の、これに相當する箇所では、ハンチントンは彼の言ふ孤立國の例としてエチオピアとハイチを挙げた後、その文を次のやうに續けてゐる。

最も重要な孤立國は、日本である。日本の獨特な文化を共有する國はなく、他國に移民した日本人はその國で重要な意味をもつほどの人口に達することもなく、また移民先の國の文化にも同化してしまふ(たとえば日系アメリカ人がそうだ)。日本の孤立の度がさらに高まるのは、日本文化は高度に排他的で、廣く支持される可能性のある宗教(キリスト教やイスラム教)やイデオロギー(自由主義や

共産主義)をとまわらないという事実からであり、そのような宗教やイデオロギーをもたないために、他の社會にそれを傳えてその社會の人びとと文化的な關係を築くことができないのである。

ここにあるのは私達の盲點を突いた指摘といふべきだらう。これほど單純明快なことが今までほとんど言はれて來なかつたことが不思議に思はれる。日本は地理的にはアジアの一國でありながら、アジアの他の如何なる地域との間にも文化を共有してはゐない。日本の文化が眞に文化として機能するのは、古來、日本國內においてのみである。日本人と中國人、朝鮮人を同文同種と稱したりするのは、人種學的にはどうであれ、文化・文明論的には誤りでしかない。日本人が外國からの影響を受けやすいのも、或は、世界平和といふが如き幻想にしがみつきがちなのも、日本と他國の間には密接な文化的つながりが無いことの結果なのであらう。かかる意味での日本の孤立は明白である。

しかし第二の特徴に移るあたりから、私はハンチントンに對して次第に距離を置きたくなる。彼の文章がすんなりとは讀めなくなつてしまふ。孤立してゐる日本の特徴としてハンチントンが二番目に指摘してゐるのは「西歐化しない日本」といふことである。彼によれば日本の近代化が實現させた社會は、「近代化の頂點に達しながら、基本的な價值觀、生活様式、人間關係、行動規範においてまさに非西歐的なものを維持し、おそらくこれからも維持しつづけると考えられる社會」であり、等しく近代的なアメリカと日本を比較すると、次のことが言へるのだと彼は『21世紀』の中で述べてゐる。⁽¹³⁾

この二國の文化は、どちらも近代的だとはいへ、まったく異なつて

いる。二國の相違點は、個人主義と集團主義、平等主義と階級制、自由と權威、契約と血族關係、罪と恥、權利と義務、普遍主義と排他主義、競争と協調、異質性と同質性といったもののあいだの差異として數えあげられてきた。

私はこの文を前にして頭をかかへたくなる。ここに書いてあることは正しいかも知れないし、正しくないかも知れない、としか言ひやうがない。たとへばアメリカ文化は平等主義で日本文化は階級制だとのことであるが、或るアメリカ人が、アメリカのビジネス社會では上層部の決定に對して平社員が意見を表明することが出来ないのに引きかへ日本ではそれが出来るのがうらやましいと述べたといふ話を私は聞いたことがある。この場合にはアメリカこそ階級制で日本は平等主義といふことになるが、これには當然、逆の場合だつてあるだらう。

ハンチントンの側に立つて言へば、さういふ個別的なケースが問題であるのではなく、文化の全體的な在り方として、アメリカは平等主義であり、日本は階級制であるといふことなのかも知れないが、私の見るところ、日本文化はアメリカ人が感じてゐるほど階級制ではなく、アメリカ文化は大方の日本人がさう思ひたがるほど平等主義ではない。

ハンチントンの二項對立の圖式は随分強引であるが、その背景にあるのは、西歐化と近代化を峻別しようとする彼の姿勢である。ハンチントンは『衝突』の中で、非西歐社會が西歐文明に對して執つた態度を拒否主義、ケマル主義、改革主義の三つに分けてゐる。この内、拒否主義に關しては一八六八年より前の日本の態度へのハンチントンの言及をすでに紹介したが、⁽¹⁴⁾改革主義はそれ以後の日本のやり方に見られるやうな、西歐文明を範として仰ぎながらも土着文化を残した上で近代化を圖らう

とする主義であり、一方、ケマル主義といふのは、トルコ共和国初代大統領のケマル・アタチュルクが目指したやうな、土着文化を放棄して西歐化しようとする主義のことである。ハンチントンにとってはこのやうに、近代化といつても西歐化を伴ふ場合と伴はない場合があつて、日本はその後者だといふことになる。「西歐化しない日本」と稱される所以である。

しかしハンチントンのこの主張には疑問を感ぜざるを得ない。私達は西歐化といふことをさういふ意味に解釋しなければならぬのだらうか。そもそも一つの社會が固有の言語を初めとする土着文化のすべてを放棄することなどあり得ない。ハンチントンも認めてゐる通り、非西歐社會が「西歐の價值觀や制度や生活習慣などをすつかり採用する」ことは「不可能に近い」のである。

西歐が率先して行つた近代化を非西歐社會がおくれて實踐しようとするればその社會は程度の差こそあれ、西歐化すると考へることも可能であるし、むしろこの考へ方の方が一般的であらう。問題はその「程度」である。すなはち西歐化する度合である。日本は明らかにそれが大きい。このことにおける土着文化の問題はもつと慎重に考察するべきであらう。第三の特徴とされる「革命のない日本」は再び私を當惑させる。早速ハンチントンに聞くことにしよう。⁽¹⁵⁾

日本の近代化にはもう一つ特徴的な點がある。日本の近代化が革命的な大激動を経験せずに成しとげられたことだ。イギリス、アメリカ、フランス、ロシア、そして中國には革命があつたし、ドイツでさえナチズムというかたちで、一種の革命があつた。

しかし、日本には革命がなかつた。日本の近代化は、上から課され

た二つの主要な改革の時代——明治維新と米軍による占領——のなかで進められたのである。社會を引き裂くやうな苦しみと、流血をともなう革命がなかつたことで、日本は傳統的な文化の統一性を維持しながら、高度に近代的な社會を築いたのである。(傍點、引用者)

私はこの記述が日本の讀者もさることながら、むしろ外國人の讀者に與へる印象の方を氣に懸ける。これだけ讀むと日本は類稀な理想的國家に見えて來るだらう。それは困るのである。

明治維新は他の如何なる革命よりも革命的だつたといふ見解が最近、日本の識者の間に始めてあるが、ハンチントンがこれを革命と認めないのは致し方がない。また「流血」といふことでは、明治維新には戊辰戦争があつたし、米軍による占領は二百數十萬の英靈の犠牲に先立たれてゐるが、このことも不問に付すとして、戊辰戦争における死者の比率はハンチントンが列擧してゐる様々の革命の場合にくらべると僅かなものであつたらうし、英靈の死は米軍による占領の歸結ではなく、前提だつたからである。しかし日本の近代化は「傳統的な文化の統一性を維持しながら」行はれたといふくんだり、讀み過ぎすわけには行かない。なるほど「二つの主要な改革」において舊來の文化がことごとく破壊されたわけではなかつた。しかしそれが大きな變容を蒙つたことはたしかであり、その後遺症は今日に尾を引いてゐるのである。

第二の西歐化にしろ、第三の革命にしろ、ハンチントンの言説はいささか恣意的であるが、その點、第一の特徴につながる第四の特徴は受入れやすい。彼は言ふ。⁽¹⁸⁾

日本は、なんらかの危機に見舞われた場合、日本に文化的なアイデンティティを感じるという理由で、他の國が結集して支援してくれることを當てにできない。一方で、他の社會と文化的なつながりがないために、他のいかなる國にたいしても文化的な共通性にもとづいて支援をする責任がなく、したがって、自國の独自の權益を思うがままに追求できる。(中略) 日本は家族をもたない文明である。つまり、日本は他の社會に家族的な義理をもっていないし、他の社會は、アメリカを含めて、日本にたいして家族的な義務を負っていないのである。

いくら日本が文化的、文明的に孤立してゐるからといって、「自國の独自の權益を思うがままに追求できる」とまでは言へないであらうが、この箇所を除けば、ここに書いてあることは正しいと思ふ。しかし日本文明は家族を持たないにしても、親戚は持つてゐるさうな氣がする。私見によればそれは中華文明では斷じてなく、西歐文明である。とはいへ、日本が「なんらかの危機に見舞われた場合」にこの親戚が日本を助けてくれるといふ保證はない。アメリカをその中含む西歐社會は、案外、日本を冷たく見放すかも知れない。私達はこのことを肝に銘じておくべきであらう。

四 内と外から見た日本

ハンチントン⁽¹⁹⁾は『衝突』の中で、二次大戦直後の日本の状況を次のやうに説いてゐる。

日本では、第二次世界大戦での壊滅的な敗北により、文化的にも混亂の極に達した。日本とかかわりの深いある西歐人は、一九九四年にこう語っている。「宗教、文化などこの國の精神活動のあらゆる側面のうち、どの程度があつた戦争に利用されたのかをいまから知ることは非常に難しい。戦争での敗北は、この國の制度にとつともない衝撃を與えた。彼らの心のなかで、すべてのものが價値を失い、捨て去られた」。かわつて、西歐、なかでも戦勝國であるアメリカと關連するあらゆる事物が入りこみ、すばらしいもの、望ましいものと見なされるようになった。ちょうど中國がソ連を眞似たように、日本はそうやってアメリカを眞似ようとつとめたのである。

その通りであらうが、この文の中で言及されてゐる「日本とかかわりの深いある西歐人」は、『衝突』の巻末の註によればアレックス・カーであり、ハンチントンはカーがジャパン・タイムズに寄せた文章に依存しながら書いたことになる。この二人の觀察がたまたま一致したといふのなら問題は無いわけだが、ハンチントンが一方では敗戦後の日本の状況を文化的な混亂の極みと評しておきながら、他方では、米軍の占領下で日本人は「傳統的な文化の統一性を維持」したと述べることは理屈に合はない。「心のなかで、すべてのものが價値を失い、捨て去られた」人々に傳統的な文化の統一性が維持出来る筈はない。ハンチントンの記述が矛盾撞着を來す一例である。⁽²⁰⁾

日本では一九八〇年代のめざましい經濟發展とは對照的に、アメリカの經濟や社會制度は失敗し「衰退」しつつあるとの認識が廣まり、

西歐に幻滅した日本人は歐米をお手本とすることをやめて、自分たちが成功した理由は自分たち自身の文化にあると考えるようになった。一九四五年、壊滅的な軍事的敗北を招いた日本の傳統は、戦後は一轉して否定すべきものとされたが、一九八五年には經濟的成功をもたらし、あらためて受け入れられるようになった。日本人は西歐をよく知るようになるにつれ、「西歐的であることは、ただそれだけですばらしい魔法をもたらしてくれるわけではないことに気づいた。彼らはみずからの社會構造を見て、そのことに気づいた」。

明治維新期の日本人は「脱亞入歐」という選擇をしたが、傳統文化の復興期である二十世紀末の日本人は、「脱米入亞」とも言うべき方針を肯定するようになった。

引用符つきの文章があることから察せられるが、この箇所にもお手本があるらしく、それは前述のアレックス・カーとカズヒコ・オザワである。ハンチントンによくよく文獻の調査に熱心な、篤學の士と見える。それはともかく、一九八五年頃の日本に「西歐何するものぞ」といふ空氣が擴がつたことは私も記憶してゐる。「西歐から學ぶ時代は終つた。これからは西歐に教へてやるのだ」といつたやうなことさへ、社會の一部では囁かれてゐた。私自身は、内心、これをいつときの思ひ上りとしてせせら笑つてゐたが、案の定、この空氣は、日本が經濟不況を迎へるに至つてなくなつた。

ハンチントンは右の文を次のやうに續けてゐる。

この傾向のなかで、まず第一に日本の傳統文化をみずからのものとして再認識する過程をへて、その傳統の價値を改めて主張し、第二

により困難なことではあるが、日本を「アジア化」しようと努力し、それぞれに固有の文化的特性はあるにせよ、アジア全般の文化と同化しようとしてつとめた。

本當にさうだつたのであらうか。經濟的成功に自信めいたものを植ゑつけられ、それに促されるやうにして、みづからの傳統文化を再認識しようとしたり、アジア全般の文化と同化しようと努めたりする機運があつたことは事實かも知れない。しかしその機運が本物であれば、如何に經濟が不況になつたとしても、十數年後の今日、日本人の精神はもう少し異なるものになつてゐたらうと思はれる。

それに第二の事柄「アジア化」は土臺からして無理な話である。ハンチントン自身、同じ一節の中で、かう書かなければならなかつた。

一つの文明圏としての日本の特異性、各國の記憶に残る日本の軍國主義、そして他の多くのアジア諸國にとって中國が經濟上の中心的存在であるという事實は、日本にとって西歐から離れていくことはできても、アジアにとけこんでいくことは難しいことを意味している。日本は自身の文化的アイデンティティを再確認することで、その獨自性と、西歐ともアジアとも異なる文化を強調しようとしている。

傳統文化の再認識とアジア化の二つにおいて、後者は前者に屈したといふことであらうか。

ハンチントンの日本論の最大の特徴は、彼が日本を獨自の、孤立した文明と見做したことであるが、その背後には、古い文化の傳統が今でも

保持されてゐるといふ思ひこみがあるやうに見える。日本人は一時的にそれを見失ふことはあつても、必ずやそれを再び見だして、その中で休らふことが出来るかと彼は考へてゐるのではないか。もつともこのことではハンチントンに批判すれば、その批判の刃が今度は自分に突きつけられることを私は承知してゐる。ハンチントンが正しくないのなら、古い日本と今の日本は文化的に見て別物であると考へなければならぬが、お前はさういふ思想の持主なのかと詰め寄せられたら、私とて然りと答へることは出来ない。たしかに平安時代の日本も江戸時代の日本も現代の日本と同じ文化協同體に屬してゐる。そのことは文化の基本である言葉の一貫性に徴して明白であらう。

しかし過去と現在の日本文化は直線的につながつてはゐないのである。近代化の以前と以後をくらべると、蓋し、兩者の間には幾つかの斷層がある。現代日本の文化的現象の先例を平安時代や江戸時代に求めることは通常むづかしい。何かが變つてしまつたのだ。かといつて變らない部分もある。この二つの兼合ひをどう表現したらいいのだらう。過去の斷絶と連續。これこそ日本の文明批評家を苦しめる最大の難問なのではあるまいか。

ハンチントンにさういふ文明批評家の役割を期待することは出来ないと言つたところで、彼の不名譽にはならない。日本文化のあやにもつと目を向けてもらひたかつたと思はないでもないが、世界中の文化と文明を調べなければならぬ立場の彼に對して、おそらくこれは無理な註文であらう。いづれにしてもハンチントンが論じた日本は外から見た日本であり、私達が日本の進路を考へる上で一つの有力な参考になることは間違ひないが、それ以上のものではない。私達は彼のやうな意見を念頭に置きながら、日本人としての感性を生かして、日本を内側から見るや

うに努力すべきである。さうすればハンチントンのいはゆる傳統文化が他ならぬ日本人の手で破壊されて行く光景が目に入るであらう。日本の破滅をもくろむ諸外國の壓力が日々高まつて行くことにも氣づくであらう。孤立國家・日本の前途はまことに多難である。

拙論をここまで読んでくれた人は——さういふ人がゐたとして言ふのであるが——私がハンチントンの日本論には限界を感じても、彼の「文明の衝突」理論には全面的に賛成してゐるやうに思つたかも知れない。しかし必ずしもさうではないのである。この理論は、どれほどそれを讀み進めても、半信半疑としか言ひやうがない。ハンチントンが文明の在り方を論じる姿勢は柔軟であるが、國際政治を論じる段になると、その柔軟さがかへつて仇になり、論が硬直化して來るやうに感じる場合もある。最近のイラク情勢や北朝鮮情勢を見てゐても、そこに文明の衝突といふ側面があるとしても、それは別種の、核兵器の保有をめぐるエゴイズムとエゴイズムの衝突といふ側面があることを無視するわけには行かない。ハンチントンのユニークな理論の眞價が判明するまでには少なくともあと十年か二十年はかかるやうな氣がする。それまでは、海のものとも山のものともつかないこの理論の成行きを、愛情を籠めて——皮肉として言ふのではない！——見守ることにしたいものである。

注

底本は次の二種類である。

- a サニユエル・ハンチントン 鈴木主税譯『文明の衝突』 集英社 二〇〇一年一月二五日第一五刷（第一刷は一九九八年六月三〇日）
- b サミユエル・ハンチントン 鈴木主税譯『文明の衝突と21世紀の日本』 集英社新書 二〇〇一年一月三〇日第一一刷（第一刷は二〇〇〇年一月二三日）

- (1) b 二十一頁
- (2) b 三十八―三十九頁
- (3) a 五十一頁
- (4) a 六十九頁
- (5) b 一一八頁 a 五十九頁
- (6) a 一〇二頁
- (7) b 二十二頁
- (8) a 五十五―五十六頁
- (9) a 四九四頁 b 一八九頁
- (10) a 五十二―五十三頁 b 一〇六頁
- (11) b 四十六頁
- (12) a 二〇四頁
- (13) b 四十七頁
- (14) a 一〇二―一〇五頁
- (15) 注(6)を参照のこと
- (16) a 一一一頁
- (17) b 四十八頁
- (18) b 四十八―四十九頁
- (19) a 一五四頁
- (20) a 一五六―一五七頁